九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『船出』における旅の意味の二重性 : ヴァージニア・ウルフによる旅行表象

大谷, 英理果
九州大学人文科学府

https://doi.org/10.15017/26974

出版情報：九大英文学. 55, pp.1-18, 2013-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

『船出』における旅の意味の二重性
－ヴァージニア・ウルフによる旅行表象－*

大谷　英理果

序

19 世紀以降、技術の発達および社会制度の改革と共に観光旅行が大衆化されていった。そのことにより男性の活動領域であった旅行を、特権階級ではない人々や女性までもが手軽に楽しむことができるようになった。その様子は、様々な文学作品に反映されている。19 世紀後半、20 世紀初頭のイギリス小説においても、女性主人公が、イギリスを離れて、外国を旅しロマンスを経験し、〈成長〉していく教養小説は珍しいものではない。その典型的な作品は、E. M. Forster の *A Room with a View* である。この作品は、主人公ルーシーがイタリアを旅行し、そこで出会ったイギリス人青年と紆余曲折はありながらも最終的には結ばれる伝統的な結婚プロットの小説である。

ヴァージニア・ウルフの処女作である『船出』（*The Voyage Out*）(1915）は、イギリス小説の伝統的な形式に則って書かれた小説である。この作品の女性主人公であるレイチェル（Rachel Vinrace）は 24 歳で、11 歳の時に母親を亡くして以降、ロンドン郊外で、父方の未婚の叔母二人と暮らしている。世間から隔絶された環境で、典型的ヴィクトリア朝婦人である叔母たちに大切に育てられたため、レイチェルは年の割に幼く恋愛や性に対しても無知であるが、ピアノの才能には大変恵まれた女性として描写されている。また、人々が何の疑問を抱くことなく行っている日常生活のしきたりに疑問を抱く鋭い感受性を持った女性として描かれていることも特徴的である。そして、レイ

---

* 本稿は、日本英文学会九州支部第 65 回大会（2012 年 10 月 28 日、於九州産業大学）における口頭発表に加筆・修正を施したものである。

チェルは、何かに対して強く感じること、その感じ方が人と異なる時に他者との間に深淵が生じるのだと思い、自分が本当に思っていることを言葉にすることにためらいを感じ、音楽の世界に閉じこもっているのである。レイチェルの父親は船会社を経営しており、レイチェルは、父親の義理の弟夫妻であるアンブローズ夫妻とともに父親の貨物船でロンドンから南米のサンタ・マリーナへと向かう。南米到着後は、そこで出会った小説家志望のイギリス青年であるテレンス・ヒューイット（Terence Hewet）と恋に落ち、婚約するも、熱病にかかりイギリスに帰ることなく、旅行地で病死する物語である。

表層的には、イギリス人による南米へのホリデー、または旅行を描きながら、レイチェルにとっては、現実世界から死の世界への旅となっているのである。[1]

ヴァージニアがこの作品に取りかかり始めたのは 1907 年からであり、この作品の大部分はレナード・ウルフと 1912 年に結婚する前に書かれたもので、結婚後も草稿に大々的な変更はなかったとされている。[2]そのためこの作品にヴァージニア・スティーブンの自伝的な要素が随所に見られることは多くの研究者が論じている。[3]『船出』は、様々な人々との出会いや経験を通して世間知らずのレイチェルが成長をしていく言わば教養小説であるが、その結末が幸せな結婚で終わるのではなく女性主人公の死で終わり、伝統的な結婚プロットからは逸脱した小説であると言える。

そこで本稿では、第一に、ウルフが描く旅行空間と死への旅というこの二つのレベルにおいてのそれぞれの旅の描かれ方を追求していくことを目的としている。そして、第二に、この作品に関する先行研究では、研究者の注意

---

[1] Alexandra Peat は、*The Voyage Out* というこの小説のタイトルが最終目的地よりも旅の過程を強調するものであることを指摘し(50)、ウルフが本作品に描き出す旅の特徴を次のように述べている。“The journey can be understood less as an attempt to find a new place than a desire to leave a known place.” (50-51)

[2] 1913 年に出版は決まったが、処女作への評価の心配がウルフのこの時期の神経衰弱を引き起こし、1913 年 9 月の自殺未遂につながった可能性が高い。出版社に出版が認められたのは二年前だが、この病気のために出版が延期され、実際には 1915 年に出版された(Majumdar and Mclaurin 7)。

[3] 例えば、Lyndall Gordon、Louise A. DeSalvo 等の研究を参照のこと。

をほとんどひいてこなかったサンタ・マリーナでのホテルの宿泊客であるスーザン（Susan Warrington）とアーサー（Arthur Venning）のカップルにも焦点をあて、レイチェルとテレンスの愛の告白が成立する密林への小旅行とスーザンとアーサーの婚約が成立する小旅行を比較し、それぞれの旅の質の違いが、レイチェルの死で終わる本作品の結末と深く結びついているということを示したい。まず、本作品の舞台である南米サンタ・マリーナという場所について考察したい。

Ⅰ：旅行の目的地サンタ・マリーナについて

『船出』は、27 の章から構成されており、第 1 章から第 6 章では、ロンドンから南米までの船旅の様子が描写されている。レイチェルの一行が、船旅が終わり､南米の架空の町であるサンタ･マリーナに到着する第 7 章以降は、レイチェルは、おばのヘレン・アンブローズ(Helen Ambrose)と古典学者のヘレンの夫と共に、海辺の丘の白い別荘で生活する。そして、そこから、物語の大部分は、丘の下にあるホテルに宿泊しているイギリス人たちとレイチェルたちとの交流や、そこでの社交と日常生活が描かれる。つまり、この地に滞在しているイギリス人たちのイギリス人社会が描写されるのである｡まず、ここでは、レイチェルたちの一行が南米に到着する第 7 章において、ウルフが、サンタ・マリーナという架空の土地がどのようにして現在の観光地として変貌を遂げたのかを描写している場面に着目したい｡作者であるウルフは、生涯を通じて、国内外を大変多く旅行しており、この小説が出版される 1915 年までには、イタリア、ポルトガル、ギリシア、スペイン、トルコ、南仏などを旅行している。しかし、南米は一度も訪れたことがなく、この小説内に描写される長い船旅の様子、南米の町や風景、先住民の描写などは、これまでにウルフが読んだことのある書物からの知識を基にして構築された架空の場所である。Jane Goldman は、ウルフによる南米表象が、ハクルートの『エリザベス朝期航海記』とコンラッドの『闇の奥』、そしてポール・ゴーギャンの絵画などから多くの影響を受けていることを指摘している（44）。また、Louise DeSalvo は、ウルフが何年もの歳月をかけて書き上げた『船出』の制

作過程を分析しており、ヴァージニアが 1909 年に訪れたイタリア（Florence）で出会ったイギリス人居住地に住むイギリス人たちの姿をサンタ・マリーナでのイギリス人宿泊客たちのモデルにしているということを指摘している(36)。また、Winifred Holtby は、Sir Walter Raleigh の *Discovery of Guiana* と『船出』の風景描写が似ている点を指摘している(78-79)。

ウルフは、サンタ・マリーナにイギリス人社会が形成された理由を『船出』第７章で以下のように説明している。

> The reasons which had drawn the English across the sea to found a small colony within the last ten years are not so easily described, and will never perhaps be recorded in history books. . . . The movement in search of something new was of course infinitely small, affecting only a handful of well-to-do people. It began by a few schoolmasters serving their passage out to South America as the pursers of tramp steamers. They returned in time for the summer term, when their stories of the splendours and hardships of life at sea, the humours of sea-captains, the wonders of night and dawn, and the marvels of the place delighted outsiders, and sometimes found their way into print. The country itself taxed all their powers of description, for they said it was much bigger than Italy, and really nobler than Greece. Again, they declared that the natives were strangely beautiful, very big in stature, dark, passionate, and quick to seize the knife. The place seemed new and full of new forms of beauty, . . . Somehow or other, as fashions do, the fashion spread; an old monastery was quickly turned into a hotel, while a famous line of steamships altered its route for the convenience of passengers. (*The Voyage Out* 80-81)

この引用では、南米への旅行を最初に楽しみ始めたのは学校教師たちであることがまず述べられている。そして、南米旅行を満喫した教師たちがサマータームまでには帰国し、旅行の体験談を話し、宣伝することによって、美しく神秘的なもので溢れているというこの地のイメージが形成されたことが

窺える。このようにして恣意的に形成されたイメージがまた多くの人々を惹きつけ消費されていき、古い修道院はホテルに改装され汽船も運行航路を変更し、観光地へと変貌を遂げたこの土地の現状をウルフは事細かに描写している。

また、ウルフは、この土地の現地の人々の属性として、「ポルトガル人の父がインディアンの母と結ばれ、その子供たちはスペイン人と結婚する」（80）というように様々な人種が混ざりあっていることを挙げている。そして、レイチェルのおばのヘレンは、この地には貴族がいないおかげで、召使いも人間であり、人々が対等であるということを述べている(86)。このようにイギリスとは大きく異なる文化を持つサンタ・マリーナに滞在するレイチェルたちだが、彼女が交流する人々は主にホテルに宿泊している知的上層中産階級のイギリス人たちだけであり、南米でのレイチェルたちの生活スタイルもイギリス風を貫いていると言える。また、ホテルにはタイムズ紙が常備されており、ホテルの宿泊客は、南米に来ても、会話の内容は新聞に記載されているイギリス国内の問題が多いのである（102-104）。しかし、ウルフは、このような外国におけるイギリス社会を E. M. Forster[4]のイタリアものの小説に見られるように諷刺して描くというよりは、無垢なレイチェルにとっての現実世界に触れる重要な社交の場、人間観察の場として描き出していることが特徴的である。

このようにホテルまたは別荘での小さなイギリス社会の中で、滞在型の旅行を楽しんでいるイギリス人たちは、気晴らしとしてピクニックと小旅行を 2 回計画し、実行する。次に、単調な滞在生活からの逸脱を象徴するこの 2 つの遠出の場面を取り上げ、比較検討し、結末で女性主人公であるレイチェルの死とどのように関連しているのかを考察したい。

---

[4] E. M. Forster は、ウルフの『船出』に対して、「登場人物のキャラクターが生き生きしていない」(“A New Novelist” 53)と指摘するも、この作品が描き出す“adventure”から次のような寓意を読み解いている。 “It is for a voyage into solitude that man was created, and Rachel, Helen, Hewet, Hirst, all learn this lesson, which is exquisitely reinforced by the setting of tropical scenery – the soul, like the body, voyages at her own risk.” (“A New Novelist” 54)

Ⅱ：Monte Rosa へのピクニック

これら 2 つの遠出の場面は、それぞれ Monte Rosa への遠足と河を遡り先住民の村を訪れる小旅行である。まず、1 つ目の Monte Rosa へのピクニックは、テレンスの思いつきで、キングズカレッジの特別研究員であるハースト（St. John Hirst）と共に計画された企画であり、ホテルの人々やレイチェルたちが誘われたものである。このピクニックを通して、レイチェルは初めてテレンスと言葉を交わすことになる。また、このピクニックで重要な出来事は、レイチェルと同じように世間から隔絶された生活を送ってきていた 30 歳のスーザンが、弁護士であるアーサーと婚約するということである。

また、2 つ目の河を遡り、先住民の村を探訪する小旅行には、レイチェルとテレンスを含めて 6 人が参加する。この小旅行を通しては、レイチェルとテレンスがお互いに、愛の告白をし婚約することになる。

このように、作品内において、スーザンとアーサーが婚約する場面とレイチェルとテレンスが結ばれる場面は、単調な滞在生活からの逸脱（ピクニック、小旅行）がきっかけとなっているのである。しかし、この二組のカップルの運命は大きく異なっていく。

まずは、Monte Rosa へのピクニックにおけるスーザンたちの婚約の場面を分析したい。

このピクニックが企画されたきっかけは、ホテルに滞在しているハーストとテレンスによる以下の会話からである。

> ‘But aren’t you enjoying yourself here?’ asked Hewet.
>
> ‘On the whole – yes,’ said Hirst. ‘I like observing people. I like looking at things. This country is amazingly beautiful. Did you notice how the top of the mountain turned yellow to-night? Really we must take our lunch and spend the day out. You’re getting disgustingly fat.’ He pointed at the calf of Hewet’s bare leg.
>
> ‘We’ll get up an expedition,’ said Hewet energetically. ‘We’ll ask the entire hotel. We’ll hire donkeys and－’ (99)

この会話からは、美しい山で、昼食を食べ、ある種の気分転換と運動不足解消も兼ねてこの遠足が企画されていることが窺える。また、レイチェルに届いたこの遠足への招待状からは、この山からの美しい景色がこの遠足の一番の目玉であることが窺える（115）。このピクニックの目的は気晴らしであり、ホテルに滞在する年配の登場人物たちもこのピクニックに参加していることから、どんな観光客でも行くことが出来る場所であるということが分かる。

Monte Rosa の頂上において、暑さや食事や広大な空間が心地よい物憂さを一行に与えていた頃に、アーサーは、スーザンを誘い、みながいる場所から離れる。そして、スーザンは、アーサーから結婚を申し込まれ、承諾する。スーザンは、好きな人と結ばれたという純粋な喜びというよりは、既婚女性という身分の仲間入りをしたということに、より喜びを感じていると言えるのである。

> Her mind, stunned to begin with, now flew to the various changes that her engagement would make – how delightful it would be to join the ranks of the married women – no longer to hang on to groups of girls much younger than herself – to escape the long solitude of an old maid's life.　Now and then her amazing good fortune overcame her, and she turned to Arthur with an exclamation of love. (127)

ここに描写されるスーザンの考えからは、結婚により、自分より若い少女たちに頼る必要がなくなり、年老いた独身女性としての長く孤独な人生を回避できることへの喜びが得られ、これらの喜びをもたらしてくれたアーサーに対して愛を抱いていることが分かる。つまり、当時の社会の結婚制度によって自分が得ることのできるステータスに、スーザンは幸福感を抱いているのである。

スーザンとアーサーの婚約の場面で、次に注目すべき場面は、この二人の愛の様子を目撃し、不愉快な思いになっているレイチェルとテレンスの様子

である。レイチェルが、二人を見て、「あまり好きではない」（128）とつぶやき、スーザンとアーサーの様子が頭に焼き付いて離れなくなってしまっていることは、生々しい恋愛に拒絶反応を示しているだけではなく、男女が結婚して生活していくことへの不思議さや無意識的な不安を示していると言える。また、このピクニックにおけるお茶の時間では、ホテルの滞在客の 1 人であるイーブリン（Evelyn Murgatroyd）とテレンスは死ぬ事について語り合っており、イーブリンは、死は恐ろしいことだと述べるが、テレンスは、ベッドの上で、眠って動かなくなればそれが死であり、そんなに恐ろしいものではないという独自の意見を述べている（133）。テレンスが、このピクニックで、このように死について自分の意見を述べていることは、この小説の最後で、婚約者であるレイチェルが他界する際に、テレンスがむしろ一体感や幸福感を感じている場面と関連している。また、死に対して恐怖心をあまり抱いていないテレンスは、このピクニックに参加している他のイギリス人たちとは性質的に大きく異なるキャラクターという印象をこの時点で、読者に与えているのである。

Ⅲ：密林奥地への小旅行

レイチェルは、河を遡り、先住民の村を探訪する 6 人での小旅行に参加する。この旅行は、レイチェルがホテルのチャペルでの礼拝に参加し、宗教に対して懐疑的な気持ちになっていた時に、フラッシング夫人（Mrs. Flushing）によって誘われることとなる。収集家の夫を持つフラッシング夫人は、自室にレイチェルを連れて行き、以下のように述べる。

> ‘I tell you what I want to do,’ she [Mrs. Flushing] said. . . .‘It’s silly stayin’ here with a pack of old maids as though we were at the seaside in England. I want to go up the river and see the natives in their camps. It’s only a matter of ten days under canvas. My husband’s done it. . . .’ (222)

ここで、フラッシング夫人は、南米に来ても、まるでイングランドの海辺に

滞在しているのと同じような滞在の仕方をしていることを嘆いている。そして、彼女は、先住民の村を見に行くという危険を伴うが冒険的で刺激的な小旅行をレイチェルに提案している。そして、フラッシング夫人が具体的にこの旅行を計画し出すと、河を見たいという強い願望を元々持っていたレイチェルもこの計画に対して次第に興奮を覚えていくのである。フラッシング夫人がこの小旅行を企画した本当の意図は、純粋な冒険心というよりは、密林奥地の部落で装飾品などを安く手に入れそれらをロンドンで高く売るという目的があったことも見落としてはならない (222)。

初めはこの小旅行を“uncomfortable” (248)、“unpleasant” (248)と表現し乗り気ではなかったヘレンも、フラッシング夫人から「快適さがほしいなら、参加しなくて結構です。しかし、もし、来なければ一生そのことを後悔するでしょう」(245)と言われ、結局は、この旅行に同意し、レイチェルたちは、この小旅行に出発することになる。つまり、この小旅行を実行することにより、「受動的」で安全が保証されている Tourist から苦痛や労働を語源とする「能動的」な Traveler になることを意味しているのである。

そして、河を遡り陸へ上陸した後の自由時間には、一行から離れて、レイチェルとテレンスは二人きりで、熱帯の密林を散歩する。ここでは、主に、『船出』の第 20 章を取り上げて、レイチェルとテレンスが散歩をしている非日常的な密林の空間とこの小説の終盤でレイチェルがかかる熱病の症状を分析したい。

『船出』の第 20 章は以下のように始まる。

> When considered in detail by Mr. Flushing and Mrs. Ambrose the expedition proved neither dangerous nor difficult. They found also that it was not even unusual. Every year at this season English people made parties which steamed a short way up the river, landing, and looked at the native village, bought a certain number of things from the natives, and returned again without damage done to mind or body. When it was discovered that six people really wished the same thing the arrangements were soon carried out. (250)

この引用が示すように、これまでにも毎シーズン、イギリス人たちはこの小旅行を享受してきており、危険でも困難でもないことが分かったので、実行されたということが第 20 章の冒頭でわざわざ述べられている。しかし、原始の暗闇へと向かう船上では、男女ともに甲板で寝ることとなり女性登場人物たちはさっそく就寝方法の問題に悩まされていることも事実である（“It was as Helen had foreseen; the question of nakedness had risen already, although they were half asleep, and almost invisible to each other.”）(251)。また、日中は、暑さにも悩まされる。やはり船上でも陸上でも快適で安全な旅とは言えない状況である。

そのような中、テレンスとレイチェルは、2 人きりで、密林を散歩することになるが、その密林の最大の特徴は、一般世界から切り離された沈黙の世界であるということである。[5] そして、その沈黙の世界の特徴は、大きく分けると 3 つある。第一に、海底を歩いている感覚であり、第二に、考えがまとまらず、会話が成立しない世界である。最後は、眠りの感覚に近い世界であるということである。1 つ目の海底を歩いているような感覚は、以下の引用によく表現されている。

> As they passed into the depths of the forest the light grew dimmer, and the noises of the ordinary world were replaced by those creaking and sighing sounds which suggest to the traveller in a forest that he is walking at the bottom of the sea. (256）

2 人が、密林の深いところへ入って行くにつれて、光はますますかすみ、一般世界の雑音は、きしる音や風がそよぐ音に取って代わられる。そして、その音は、密林の中にいる旅人に、海の底を歩いているように感じさせるので

---

[5] Alexandra Peat は“silence”という用語が、レイチェルたちの河を遡る密林奥地への小旅行と *A Room with a View* におけるルーシーたちのフィエーゾレ（Fiesole）への遠出の場面のどちらにも使用されていることに着目し、この二つの場面の類似性を次のように述べている。“. . .it is similarly presented as a chance to escape from the narrative constructs and cacophony of voices that infiltrate the travellers' experience.”(54）

ある。このような沈黙の世界で、ぎこちなく、2 人は、お互いがお互いを好きでいるということを確認する。

その後、テレンスは、フラッシング氏が、1 時間で戻ってくるようにと言っていたことを思い出し、みんながいる場所に戻ろうとするが、テレンスとレイチェルは、帰りの道に迷う。テレンスは、「私たちはとても遅れている」と繰り返し言うが、それは眠りながら言っているかのようだったと描写されている（‘“We’re so late － so late － so horribly late,” he repeated as if he were talking in his sleep.’）（258）。そして、この沈黙の世界が、眠りの世界の性質と類似しているということが描写されているのである（“They walked on in silence as people walking in their sleep, . . .”）(258)。

吉田良夫氏は、レイチェルとテレンスが、密林に入り込んだ行為を「象徴的には、日常と離れた別の次元へ踏み入る行為である」（64）と述べている。また、二人の愛が成就するためには、この異次元の世界が必要である理由を「二人は、「現実の背後」にあるものに惹かれる故に、恋に落ち、その愛は現実の世界で成就しえないものであるが故に、別の世界を必要とする」と説明している（66）。テレンスとレイチェルが婚約した後に、レイチェルが幸せは感じても結局は、彼との間に深淵を感じているという今後の展開も考慮すると、吉田氏の指摘は説得力があると言える。

また、レイチェルとテレンスの愛の告白が、いかに神秘的で特別なものであるかということは、気軽な Monte Rosa へのピクニックではなく、イギリス人の旅行客が簡単には行けない空間と場所でしか愛の告白がなされていないということが物語っているだろう。つまり、旅行という行為において、命の安全が保証されていない空間へ侵入していくことによって、テレンスとレイチェルの愛の告白はなされているのである。

そして、テレンスとレイチェルが一行に加わった後に、蒸気船に戻り、お茶を飲む場面では、テレンスが二つの存在の世界（層）を感じている場面が重要である。その時、テレンスは、フラッシング夫妻の話を聞いており、存在の仕方が 2 つの異なった層で進行しているように思えるのである（“It seemed to Terence as he listened to them talking, that existence now went on in two different layers.”）(259)。フラッシング夫妻は、テレンスよりも高いどこかの

空中で話していて、彼とレイチェルは、世界の底（“the bottom of the world”）に一緒に落ちてしまっているかのように感じるのである（259）。

密林の散歩の場面で、使用されていた言葉は、「海の底」（the bottom of the sea）であり、蒸気船に戻ってからは、「世界の底」（the bottom of the world）という表現が使用されている。二つの異なった層、つまり上下の異なった層をテレンスは感じ、下の層に、彼とレイチェルは落ちてしまっていると考えているのである。この表現は、熱病発症後のレイチェルの病状とも関連する。

> The heat was suffocating.　At last the faces went further away; she fell into a deep pool of sticky water, which eventually closed over her head.　She saw nothing and heard nothing but a faint booming sound, which was the sound of the sea rolling over her head.　While all her tormentors thought that she was dead, she was not dead, but curled up at the bottom of the sea.　There she lay, sometimes seeing darkness, sometimes light, while every now and then some one turned her over at the bottom of the sea. (322)

高熱にうなされた後、レイチェルは、ついに様々な顔が区別できなくなり、粘っこい深いプールの中に落ちて、海の底に丸まっていたと描写される。レイチェルのこの病気の原因が、先に分析した密林奥地への小旅行だったのか、レイチェルたちが滞在している白い別荘の不衛生さに起因しているのかは、物語の中でははっきりと説明はされていない。しかし、レイチェルが熱病によって感じている感覚は、テレンスと 2 人で、密林を散歩した時の「海底」という感覚と非常に類似している。先に挙げた吉田氏も、レイチェルは、「熱病」で他界するが、彼女が実際に船出した世界は、あの密林で垣間見た世界であり、彼女の死は現世では成就不可能であるものを求めるがために密林で垣間見た世界へ他界したのだと指摘している(77)。つまりスーザンにとっては、結婚は女性が抱える問題の全ての解決策だったが、レイチェルは恋、結婚さえも、人と人とを本当に結びつけるものではないことを悟り、完全な融

合の世界を求めて他界するのである。[6]

レイチェルの死後、テレンスのその後の人生がどのように変化するのかは作者によって、一切語られることはない。レイチェルの死後は、主にホテルの人々の様子が描写され、この小説は幕を閉じる。その中でも、特に象徴的なのは、Monte Rosa への遠足で婚約が成立したカップルであるアーサーとスーザンがレイチェルの死について会話をしている場面である。レイチェルの死を知り、ショックが大きいイーブリンを前にして、スーザンは、とても悲劇的だと言ってアーサーに目をやる。アーサーは、さらにレイチェルの死に対して、以下のように付け加える。

> ‘Hard lines,’ said Arthur briefly. ‘But it was a foolish thing to do – to go up that river.’ He shook his head. ‘They should have known better. You can’t expect Englishwomen to stand roughing it as the natives do who’ve been acclimatized. I’d half a mind to warn them at tea that day when it was being discussed. . . .’ (341)

「河上りをするなんて馬鹿げたことだった」という台詞を言い、イギリス人

---

[6] Jane Goldman はレイチェルの死について、 “The stylised story of Rachel's personal development, romantic courtship and then decline, however, is simultaneously a structural device that allows the novel to expose and critique the workings of the British imperialist and class system in which she is caught up”(42)と述べている。また、Ann Ronchetti は、レイチェルの死の理由を以下のように説明している。“Some critics view Rachel’s dissolution in illness and death as unconsciously willed, as both a means of escaping from the dismal prospect of enforced existence in an everyday world that severely limits her life as a woman, and a means of casting off the burden of selfhood, merging with the universe in death. It is probably safer to assume that these motivations would be the author’s, and that Woolf was projecting her own wishes in assigning her highly autobiographical heroine such a fate;. . . .”(27) このように、完全な融合の世界や自由を求めるレイチェルのような女性の居場所が当時の社会にはなかったために死んだのだというこれらの説は広く一般的に受け入れられている。これらの解釈に加え、本論文で明らかにしたかったことは、自分が求める世界をレイチェルは旅行中に垣間見ていることである。南米旅行の中でも、安全で小さなイギリス社会を抜け出し、非日常的で慣習的なしがらみからも離れた密林空間に自分の居場所を見つけたために、社会構造が支配する本来の日常（イギリス）へ戻ることを拒絶した女性の物語として本作品を解釈できることを呈示した。

女性が先住民のような不便な生活に耐えられるわけがないという皮肉を付け加え、レイチェルたちの無防備な密林奥地への小旅行をアーサーは批判しているのである。

しかし、臨終の床で、レイチェルはほほえみを浮かべており、テレンスすらもレイチェルの死によってもたらされたものは、悲しみではなく、“peace”(333)である。社会が与える制度の中で、矛盾も感じることなく幸せであると信じ込まされているスーザンとアーサーの今後の日常生活と、レイチェルとテレンスの愛のあり方はどちらが本当の意味で幸せであると言えるのかは分からないのである。

レイチェルの旅は、南米滞在の中でも、特に、非日常性の強い密林の空間において、世界の底にいるというような象徴的な死に似た感覚を体験し、その海の底の虚偽のない理想的な世界に自分の居場所を見つけてしまったために、日常世界へ戻ることを拒絶した女性の物語として読み返せるだろう。

Ⅳ：先住民の村を見ることについて

また、もしこの小説を観光旅行の悪を象徴した寓話として読み返すならば、最後の密林奥地の先住民の生活を見る旅において、最終目的地である村を訪れた 6 人のイギリス人たちと先住民たちとの視線の交差を分析する必要がある。村では、女性たちが藁を編んだりしている様子を一行は観察する。村の女性たちもイギリス人一行をじろじろと見て、目で追うが、やがて注意を払わなくなる(269)。

レイチェルたちはこの経験を通して以下のように感じている。

> Peaceful, and even beautiful at first, the sight of the women, who had given up looking at them, made them now feel very cold and melancholy. (269)

イギリス人一行が、小屋の中の様子を観察する時は、“they peer into the huts”(269)と表現され、最初こそ、先住民もよそ者の一行を見つめ続けるが、その内に関心を向けなくなると、レイチェルたちは、冷たさやもの悲しさを

感じている。

ウルフとも交流が深い E. M. Forster の『インドへの道』の第三部（神殿）で、行列を見物しているイギリス人であるフィールディングたちの行動にインド人であるアジズは以下のような不快感を覚える場面がある。

> Those English had improvised something to take the place of oars, and were proceeding in their work of patrolling India. The sight endeared the Hindus by comparison, and looking back at the milk-white hump of the palace he hoped that they would enjoy carrying their idol about, for at all events it did not pry into other people's lives. This pose of 'seeing India' which had seduced him to Miss Quested at Chandrapore was only a form of ruling India; no sympathy lay behind it;. . . .(*A Passage to India* 291-92)

イギリス人女性 Miss Quested のインドを見たいという欲求は、イギリス人たちのインド支配の一形態にすぎず、その背後に思いやりなどないのだとアジズは痛感している。つまり、Miss Quested のインドを見たいという欲求そのものが、彼女が嫌っていたインドを支配するイギリス夫人たちと何も変わらないのだということが明らかになっているのである。他の人々の生活をのぞき込むこと（見たいという欲求）に含まれる支配の構造を『インドへの道』が描き出していることは、『船出』の村落観光の場景においても、観光という名のもとで、西洋諸国の裕福層が非文明社会をあたかも観光旅行のアトラクションとして見物することを楽しみ、そこで不等に安い値段で品物を確保するという資本主義的支配の一形態と言える。『船出』において、村の女性たちが見つめ返した後でまったくイギリス人たちに注意を払わなくなることで、イギリス人観光客は、ある種自分たちの優越性を否定された感情を伴ったため、さびしさを感じたのではないだろうか。つまり、現地の女性たちによってまなざしが向けられ、そして、彼らの優越性を否定するがごとく彼らに無関心になる様子は、先住民の日常生活を覗き込み侵入してくる観光客への声のない抵抗を示していると言えるのである。つまり、彼女たちは観光客にまなざされ、所有されるだけの存在ではないということを暗に示していると考

えられる。

結論

この小説の最終章は、ホテルにいる宿泊客の様子とハーストだけが描写される。その中では、レイチェルやアンブローズ夫妻、テレンスの話題は一切誰もせず、嵐が去った後のホテルの人々の上機嫌な様子が描かれる。ソーンベリー夫人は、フラッシング夫人に「明日、帰るのですか？」と聞き、フラッシング夫人は、「そうです」と答えている（351）。つまり、このホテルの人々は、バカンスが終わり、本来の日常であるイギリスに戻っていくことが示唆されている。

スーザンとアーサー、レイチェルとテレンスの二組の婚約が成立するそれぞれの小旅行の特徴は、前者が、日常世界的で小市民的であるのに対し、後者は、日常逸脱的であり“life”の深層へ降りていく異世界的性質を帯びたものである。レイチェルが旅行中にしたことは、まさに、自分が今まで知らなかった世界を発見し、人々や人生の虚偽を嫌い、常に真実と自己を追求することであった。その姿勢は、結果的には、ありきたりで安全な旅行空間から逸脱する行為につながり、そこで垣間見た沈黙の世界に居場所を見つけ、彼女はそこに留まることにしたのである。ウルフは、この作品において、自分をリフレッシュさせるための安全な旅行と現実の背後にある世界を追求するがために、旅行を超えた死への旅の 2 種類の旅を描いていると言える。また、視点を変えて、ウルフによる旅行表象を言い換えるならば、レイチェルの死が象徴していることは、「本物が見たい」という旅行者の欲求を満たすためにその土地固有の社会や文化に暴力的に侵入していく現代観光のあり方に対する寓意であり、彼女はその犠牲者になったと読むこともできるのではないだろうか。

参考文献

Boorstin, Daniel. *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*. 25th Anniversary Ed. New York: Random House, 1992. (ダニエル・ブーアスティン 『幻影の時代』 後藤和彦・星野郁美訳　東京創元社, 1964 年)

Carr, Helen. “Virginia Woolf, Empire and Race.” Sellers 197-213.

DeSalvo, Louise A. *Virginia Woolf’s First Voyage: A Novel in the Making.* London: Macmilland, 1980.

Eto, Teruko. *Virginia Woolf and the Language of Silence: Between Individuality and Community.* Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, 2009. 19-42.

Forster, E. M. *A Passage to India*. London: Penguin, 2005.

---. “A New Novelist.” Rev. of *The Voyage Out*, by Virginia Woolf. *Daily News and Leader* 8 April 1915, 7. Majumdar and Mclaurin 52-55.

Froula, Christine. *Virginia Woolf and the Bloomsbury Avant-Garde: War, Civilization, Modernity.* New York: Columbia UP, 2005.

Goldman, Jane. *The Cambridge Introduction to Virginia Woolf.* Cambridge: Cambridge UP, 2006.

Gordon, Lyndall. *Virginia Woolf : A Writer’s Life*. New York: Norton, 1984.

Holtby, Winifred. *Virginia Woolf: A Critical Memoir.* London: Continuum, 2007.

Majumdar, Robin, and Allen Mclaurin, eds. *Virginia Woolf: The Critical Heritage*. London: Routledge, 2009.

Peat, Alexandra. *Travel and Modernist Literature: Sacred and Ethical Journeys.* New York: Routledge, 2011.

Raitt, Suzanne. “Virginia Woolf’s early novels: Finding a voice.” Sellers 29-48.

Ronchetti, Ann. *The Artist, Society and Sexuality in Virginia Woolf’s Novels.* New York: Routledge, 2004.

Sellers, Susan, ed. *The Cambridge Companion to Virginia Woolf.* Cambridge: Cambridge UP, 2010.

Turner, Victor. *The Ritual Process: Structure and Anti-structure.* London: Routledge, 1969.

Woolf, Virginia. *The Voyage Out*. London: Penguin, 1992.

吉田良夫　『ヴァージニア・ウルフ論　改訂版―ヴィジョンと表現』葦書房、1999 年 pp53-81.